

Title	大正・昭和初期における海軍士官の米国留学：山本五十六、山口多聞、伊藤整一を中心に
Sub Title	Study in USA of naval officers from 1919 to 1929 : focusing on the case of Isoroku Yamamoto, Tamon Yamaguchi and Seiichi Ito
Author	小川原, 正道(Ogawara, Masamichi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2021
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.94, No.8 (2021. 8) ,p.1- 22
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20210828-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大正・昭和初期における海軍士官の米国留学

——山本五十六、山口多聞、伊藤整一を中心に——

小川 正道

- 一、はじめに
- 二、山本五十六とハーバード大学
- 三、山口多聞とプリンストン大学
- 四、伊藤整一とイエール大学
- 五、むすび

一、はじめに

一九一九年（大正八年）から一九二九年（昭和四年）にかけて、のちに太平洋戦争の際に日本海軍を率いることになる、山本五十六（開戦時、連合艦隊司令長官。一九四三年、戦死）、山口多聞（開戦時、第二航空戦隊司令官。一九四二年、戦死）、伊藤整一（開戦時、軍令部次長。一九四五年、戦死）といった海軍士官が、次々と米国駐在を命じられ、それぞれハーバード大学、プリンストン大学、イエール大学に留学した。⁽¹⁾

いずれも大尉・少佐級の人事だが、吉田満は、「海外駐在および留学は、少壮士官に見聞をひろめる機会を与えるとともに、将来の外交戦に備えて有力な戦士を養成することを目的としており、留学経験者が帰国後しばらく他の勤務についてから、ふたたび駐在武官として赴任する例もすくなくなかった」と述べている。⁽²⁾ 実際、山口は、その後、駐米日本大使館付海軍武官として再度渡米した。英国と米国への留学は、日本海軍における重要な出世コースでもあった。⁽³⁾ なお、日露戦争後の一九〇七年に策定された帝国国防方針で、米国はロシアに次ぐ仮想敵国のひとつになっていたが、一九二三年改定の帝国国防方針には、「帝国ノ国防ハ我ト衝突ノ可能性最大ニシテ且強大ナル国力ト兵備トヲ有スル米國ヲ目標トシ主トシテ之ニ備ヘ」とあり、最大の仮想敵国と位置付けられている。⁽⁵⁾

山本が米国滞在中に石油や航空機に関心をもったことは、よく知られている。山口も現地で意欲的に英語や歴史などを学び、米国人と交遊を重ねた。伊藤が、在米中にレイモンド・A・スプルーアンス米国海軍中佐（のち、海軍大将）と親密な関係を構築したことも、比較的有名である。しかし、明治期については、アナポリス海軍兵学校への日本人の留学や海軍士官の米国留学について、高木不二や中拂仁、島田謹二の研究などがあるのに対し、大正・昭和初期は、現地の大学に残されている資料や日本側の公文書などを用いて、海軍士官の留学の軌跡を追った研究は、管見の限り、ほとんど見当たらない。例えば山本の留学についても、田中宏巳は、「勉強については、着いた年の七月から英語夏期講習を受けたことぐらいはわかっているが、それ以上のことはほとんどわからない」と指摘している。⁽⁷⁾

第一次世界大戦後、戦勝国として国際社会で急速に台頭した日本と米国。その渦中で、およそ二年の間、米国に滞在し、その間に大学で勉学に励むことになった海軍士官たちは、現地で何を学び、何を吸収して帰国したのか。本稿は、山本、山口、伊藤の事例を取り上げ、受け入れ先となった各大学に残されている資料、日本側の公

文書や私文書、および関係者の回想や伝記研究の成果などを踏まえながら、この点を検討しようと試みるものである。

二、山本五十六とハーバード大学

山本五十六は一八八四年（明治十七年）四月四日、新潟県長岡に生まれ、一九〇四年に海軍兵学校を卒業し、日露戦争に参加、横須賀鎮守府司令長官副官兼参謀、海軍大学校甲種学生、第二艦隊参謀、海軍省軍務局員などを歴任する。第一次大戦後の一九一九年四月五日に米国駐在を命じられ、同年から翌年にかけて、ハーバード大学に留学した。渡米時点で三十五歳、階級は海軍少佐である。⁽⁸⁾

新渡戸稲造が一八九一年に刊行した『日米関係史』によると、一八七一年から一八八六年末までの間に、「ハーバード大学には、最も優秀な若者の何人かが留学」しており、ロー・スクール、カレッジ、メディカル・スクールなどで計十五名が学んだとい⁽⁹⁾う。その後も留学生者は途絶えておらず、海軍士官でも、一九一三年から永野修身（のち、軍令部総長）が少佐で留学している。永野は山本在米中の一九二〇年十二月、駐米日本大使館付海軍武官を命じられ、山本の上司となった。⁽¹⁰⁾

一九一九年四月二十八日、栃内曾次郎・海軍次官は幣原喜重郎・外務次官に対し、山本が「語学及一般海軍軍事研究ノ為……駐在被仰付候」として、米国政府にこの旨を通牒するよう依頼し、決済されて⁽¹¹⁾いる。栃内次官宛の山本の報告書によると、山本が米国に向けて横浜港を発つたのは、五月二十日、ワシントンDCに到着したのが六月九日で、ボストンに着いたのは六月十四日である。翌年五月十八日には、ボストンからワシントンDCに転居している⁽¹²⁾。この間、後述するように、ハーバード大学に「特別学生」として在籍していたのは、一九一九年

九月から翌年二月までの約五ヶ月であった。

一九一九年六月十九日付で山本が兄の高野季八に宛てた書簡では、ボストン近郊のブルックラインの「下宿」に住んでおり、そこは老婆とその娘の「家族二名」の家で、朝食を一緒にとって「会話の稽古」をしていると述べられており、日本に比べて米国は物価が高いことが詳しく記されている。来週から「家庭教師」を雇い、七月一日から、ハーバード大学の「英語夏期講習」に行くという。⁽¹³⁾

さらに同年九月三日、山本が高野に宛てた書簡には、次のようにある。

本月二十一日より愈々、ハーバード大学の一生徒と相成筈ニ御座候。尤も学校とて、誠ニ自由ニて、熱心ニやる考えのものハ、外国人ニ対する英語教授のみニて、他ニ歴史、政治の如き二三課目を慰み半分に採るといふニ過不申、どうせ永くも一年、短かけれハ、今年一杯ニてワシントンへ参らねハならぬことと存居候ニ付、学校もたは彼等、米国青年研学の一般を、割あひに委しく、知り得る位か取柄と存居候。しかし、昼ハ学校、夜ハ家庭教師と謂ふ次第なれハ、老骨ニハ充分の仕事なるへく、一年位ハ匆匆経過可致と存居候⁽¹⁴⁾

九月二十一日からハーバード大学の学生となる予定であること、英語を中心に、歴史、政治を学ぶこと、留学の予定は一年程度で、ワシントンDCに移る予定であること、留学目的は米国の青年の勉強状況を知ることであること、さらに、昼は学校、夜は家庭教師を雇って勉強すること、などがわかる。

ハーバード大学アーカイブスが所蔵する山本自筆の入学申請書は、この入学予定日の翌日、九月二十二日に記されており、山本は入学目的欄に「私は英語力のみを向上させなければなりません」と記入している。どんな指導を受けたいか、という欄には、「外国人学生向けの英語の特別指導」と記載して、「特別学生」として入学を申請した。歴史や政治を学ぼうという意志はみられない。なお、住所はハーバード大学近くの「157 Naples Rd.

Brookline, Mass.]と、同じ住所に住む人物として「Mrs. Sarah Elvira Clifford」と「Mrs. Frederick Charles Marrow」の二人の名が記されている。⁽¹⁵⁾先述の老婆とその娘とは、彼女たちのことである。山本は大学の寄宿舎には入らず、一般家庭に下宿しながら英語を学んだ。

九月二十八日に山本は高野に絵葉書を送り、「本日曜日常例の会話（毎日曜二内の者ニ、日本の事を一つ宛、話し、会話の練習ニ資し居候）の好資料と致候」と、英会話練習の現状を伝えた上で、「漸々ハーバード大学の生徒と相成候。皆々様ニよろしく」と述べており、入学申請が許可されたことがわかる。⁽¹⁶⁾

やはり、ハーバード大学アーカイブスに残されている山本の成績表がある。それによると、山本は「特別学生」としてイングリッシュEというコースを履修しており、一九二〇年一月の第二週に二回欠席したのみで、あとは一九一九年九月から翌年二月まで、すべて出席するという勤勉ぶりをみせている。前年十一月にはレポートを一回提出しているが、評価は「C+」であった。一九二〇年二月に、退学した旨が記載されている。⁽¹⁷⁾イングリッシュEは、外国人学生向けに英語の特別指導を行うコースで、英語のライディング、スピーキング、暗唱などの練習が課された。⁽¹⁸⁾やはり歴史や政治を学んだ形跡はみられないが、「熱心ニやる考えのものハ、外国人ニ対する英語教授のみ」という当初の目的には沿った学習であった。ただ、成績からみると、英語には苦勞したことがうかがえる。この間、一九一九年十二月八日には、高野に宛てた絵葉書で、「学校冬休ニ付、一寸、紐育（六時間）へ出かける筈ニ御座候」と、山本はニューヨークに出かける旨を伝えている。⁽¹⁹⁾

ハーバード大学時代の同窓生たちは、山本とともに楽しい学生生活を送ったことを回想している。共にハーバードで学んでいた森村勇は、山本の死去翌年に刊行された『憶山本元帥』で、留学時代の山本とマラソン競争やボーリング、日本料理屋でのすき焼き会などを楽しんだという追憶話を寄せている。⁽²⁰⁾同書では、同じく留学仲間だった小熊信一郎が、山本と二十六時間ぶつ通しで七十五番将棋を指した、という思い出も語っている。⁽²¹⁾また、

海軍機関大尉としてマサチューセッツ工科大学 (MIT) に留学していた三戸由彦は、ボストンで山本を迎え、散策を共にしたり、さまざまな米国人と交遊したり、視察旅行に同行したり、米国人とチェッカーの勝負をしたことなどを回顧している⁽²²⁾。

阿川弘之は『新版 山本五十六』のなかで、「ハーヴァード大学の、外国人留学生に英語を教えるイングリッシュEというクラスに籍を置いて、自由な勉強をしていた。よく勉強もしたが、よく遊びもしたらしい」と述べているが、⁽²³⁾ 妥当な記述といえよう。

ほかのハーバード大学のクラスメイトは山本について、働き者ではあるがガリ勉ではなく、並外れて好奇心が強く想像力に富んでいたと述べており、特にポーカーのプレーヤーとして記憶している。寝ずに夜通しでポーカーを楽しみ、最後は勝利を収めていたという。ただ、ホワイトハウスは山本の大学生活について危険視し、チェックを行っていた⁽²⁴⁾。

一九二〇年一月一日、山本が栃内次官に宛てて提出した報告書には、次のようにある。「主トシテ「ハーバード」大学ニ在リテ語学ヲ修習シ併セテ一般海軍々事研究ノ準備トシテ米國歴史、行政、社会組織等ノ研究ニ従事セリ」。ハーバード大学では語学を、学外で米国の歴史や行政、社会などを研究していることがうかがえよう。この頃もまだ英語には苦戦していたらしく、「会話ハ簡易用件ヲ弁シ得ルノ程度ニシテ新聞雑誌等ハ辞書ヲ使用セサレハ通読困難ナリ」とも述べている⁽²⁵⁾。

その後山本は、一九二〇年五月にワシントンDCに移り、国際会議の事務などを担当したあと、一九二一年二月十四日には佐藤三郎(海軍少佐)、後藤兼三(海軍機関大佐)とともに、ニューヨークの海軍工廠に赴き、戦艦テネシーを視察して、長文の報告書を井出謙治・海軍次官宛に提出した。この米國滞在生活が終わって帰国したのは、同年七月十九日のことである⁽²⁶⁾。

山本は米滞在中、米国の石油の研究・視察に取り組み、カリフォルニアやテキサスの石油産地や製油所などを視察したほか、睡眠時間を削って関連文献や新聞を大量に読み込んでいたという。水囊を頭に乗せて勉強している姿を時々見かけた、との逸話も残っている。メキシコの油田の視察にも出かけたほか、航空機についても強い関心を持って研究と現地視察を試みた⁽²⁷⁾。なお、米滞在中の一九一九年十二月一日に、山本は少佐から中佐に進級している⁽²⁸⁾。

山本がなぜ航空や石油に関心をもったのか。田中は、留学の指導をしていたのは駐日米大使館付海軍駐在武官であり、山本が米国に到着した際の駐在武官は上田良武大佐で、上田は「海軍における航空機開発の先頭に立ち続けた人物」であり、山本が航空の将来性や、その燃料となる石油に注目したきっかけは、上田の指導にあると指摘している。山本は上田に定期的に報告書を提出して指導を受け、視察の旅費も上田が支給していたとして、「上田の指導が強く作用していたのは間違いあるまい」としている。上田は永野と交代して帰国後も、海軍の航空畑を歩み続けた⁽²⁹⁾。

山本没後に刊行された朝日新聞社編の『元帥山本五十六伝』は、「この二年の学究生活に、得るところはすくなくなかった。米国といふところ、米国人といふ人種、米国人の、いゝところと悪いところ、強いところと弱いところ、それらを体得した。米国人を相手に物事を交渉する手、米国人を相手に戦ふ戦略は、おのづから山本少佐の会得するところとなつた」と評している⁽³⁰⁾。

山本は、一九二五年十二月一日に駐米日本大使館付海軍武官を命じられて、再度渡米した⁽³¹⁾。駐在武官在任中、一九二七年二月から補佐官として仕えた三和義勇は、「この頃から元帥は米航空のことについては犀利な眼で注視しておられた」として、大西洋横断飛行を達成したチャールズ・A・リンドバーグやリチャード・E・バーダなどの飛行について研究し、意見を出すように言われ、日本海軍も「感」に頼るのではなく「計器飛行」を重

視すべきだと述べたところ、山本は同意し、報告書を添削してくれたと回想している⁽³²⁾。上田によって航空機に開眼した山本は、駐在武官という同じ立場に立ったとき、後進である三和に対して、やはり航空機研究について指導していたわけである。

麻田貞雄は、「山本の場合、四年以上にわたる駐米勤務の体験から、現実的な対米認識を身につけていた」として、山本が米国人の闘争心や冒険心を強調し、後述するワシントン海軍軍縮会議の比率を肯定していたとした上で、山本が最初の米国防駐在と駐在武官時代を通して、「ウィリアム・ミッチェル將軍がさかんに鼓吹していた航空本位の新しい兵学思想の洗礼を受けていたものと思われる。二八年に帰国したとき、彼は近い将来に航空機が洋上決戦の主兵になると断言した」と指摘している⁽³³⁾。

二度の米国防駐在を通して、山本は米国人の国民性や航空技術、石油についての知見を深めた。一九二七年十一月十五日に帰朝を命じられた山本は、翌年に軍令部出仕、空母「赤城」艦長などを経て、一九二九年にロンドン海軍軍縮会議に随員として参加した後、海軍航空本部技術部長、第一航空戦隊司令官、海軍航空本部長、海軍次官などを歴任して、一九三九年に連合艦隊司令長官となり、真珠湾攻撃を迎えることになる⁽³⁴⁾。

三、山口多聞とプリンストン大学

太平洋戦争において、山本の下で戦い、ミッドウエー海戦で第二航空戦隊司令官として空母「飛龍」で指揮を執り、戦死した山口多聞も、山本とほぼ同時期に、ニュージャージー州のプリンストン大学に留学していた。一九二二年八月十七日に東京に生まれ、一九一二年に海軍兵学校を出た山口は、海軍砲術学校学生、海軍水雷学校学生などを経て、一九二一年二月二十五日に米国防駐在を命じられ、海軍大尉で渡米することとなる。この時点

で、二十八歳であった。⁽³⁵⁾

一九二一年三月四日、井出次官が埴原正直・外務次官に対し、山口が「今般語学及一般海軍軍事研究ノ為……駐在被仰付」として、米政府にこの旨通牒するよう依頼があり、決済を受けている。日本を発つ予定日は三月二十五日、駐在期間は二年であった。⁽³⁶⁾ 米国に到着した山口は、ワシントンDCの日本大使館を訪れると、石油研究に取り組んでいた山本がおり、その机には米国内の石油産地や製油所に関する文献が山積みになっていて、圧倒されたという。⁽³⁷⁾ プリンストン大学はかつてニュージャージー大学という名称であり、折田彦市（のち、第三高等学校校長）を最初の卒業生として、以後も日本人留学生を迎え入れており、一八九六年にプリンストン大学と改称して以降も、キリスト教社会運動家の賀川豊彦などが留学している。⁽³⁸⁾

プリンストン大学アーカイブスの記録によれば、山口は武藤嘉一（のち、慶應義塾大学教授、衆議院議員）とともに大学院に所属していたが、山口は武藤とは別々に暮らし、一九二一年から翌年まで、大学院の寄宿舎で過ごした。⁽³⁹⁾ 武藤と別に暮らして寄宿舎で過ごしたのは、日本語を使う機会を減らし、英語力を上げるためだったものと思われる。かくして、山口は全米各地から来た二十歳前後の若者と日夜、付き合うこととなる。⁽⁴⁰⁾

一九二二年一月から六月までの山口の学習の記録が、六月二十日付で山口から井出次官宛てに報告されている。山口は、「プリンストン大学ニ於テ左記学科ヲ習得シツ、兼子テ英語勉学ヲ志サセリ」として、「アメリカ合衆国史」と「立憲政府」の二科目を挙げている。このほか、大学の「寄宿舎ニ住ム友人ト日々相接スル機会」を通じて、「個人教師」によって「英作文並ビニ発音ノ匡正」を受けているという。山口は七月から八月にかけてメイソ州で開かれる少年向けの「キャンプ」に参加して、「専ラ会話ノ練習ニ資セムトス」としており、同年九月にプリンストンを去って国内旅行に出、ニューイングランド地方の各地を回り、「英語研究旁々、地方人情風俗ヲ視察」する、との予定を記している。⁽⁴¹⁾

留学中、山口は、ちょうどワシントンDCで開かれていた海軍軍縮会議に裏方として参加している。この会議の冒頭で、米国側が英・米・日の艦艇の保有比率を「一〇・一〇・六」とするよう提案し、海軍首席随員の加藤寛治・中将が「対米七割」を強硬に主張するなかで、首席全権の加藤友三郎は米国との軍備競争を避ける観点から、提案を受諾した。⁽⁴²⁾

山口は、プリンストン大学で米国人と交際するなかで、彼らは背が高く逞しく、スポーツが好きでユーモアもあり、自助独立の精神もあって、できれば喧嘩をしたくない相手だと思うようになったという。⁽⁴³⁾ 山口の三男・宗敏は、「父はこれらの学生たちに伍して総ての艱難に堪え、異国での学生生活を満喫した。そういう父の姿に接した学生たちは、生来のきさくさもあって、「タモン、タモン」と呼んで親愛の情を示した。……父のこの二年間の留学生生活は、日本内地に居てはとうてい学び得ないアメリカのフロンティア精神というものを体得し得たのである」と記している。⁽⁴⁴⁾ このあたりの記述は、ノン・フィクション作品や遺族の証言によるもので、山口を高く評価しようとする傾きが強いが、米国人と交流するなかで、その気質に触れたことは事実であろう。軍縮会議への参加も含めて、国際的視野が一気に開かれた米国駐在であった。

一九二三年三月十日に帰朝命令を受けて帰国後、山口は翌年に海軍大学校甲種学生となり、一九二七年から軍令部に出仕、一九二九年には山本とともにロンドン海軍軍縮会議の随員を務めている。一九三四年、駐米日本大使館付海軍武官として再度渡米し、二年後に帰国を命じられ、一九四〇年に第二航空戦隊司令官となって、翌年、真珠湾攻撃に参加する。⁽⁴⁵⁾

四、伊藤整一とイエール大学

山本は先述の通り、一九二五年十二月一日に駐米日本大使館付海軍武官に任じられて再度渡米するが、この在任期間中に米国駐在のため山本のもとを訪れたのが、伊藤整一であった。伊藤は一八九〇年七月二十六日、福岡県三池郡に生まれ、一九一一年に海軍兵学校を卒業、海軍大学校乙種学生、第五艦隊參謀、霞ヶ浦航空隊附などを経て、一九二七年五月一日、海軍少佐で米国駐在を命じられた。三十六歳である。⁽⁴⁶⁾

伊藤の回想によると、七月十日にワシントンDCに到着し、翌日、同行していた小林謙五（海軍少佐）、中野実（海軍中尉）とともに武官事務所を訪れると、山本は、伊藤に対し次のように語ったという。

駐在員が一日三度の食事を、しかも定刻にしようなどは、もつてのほかの贅沢だ。三度の食事をするのは日本での話さ。君たちも「アメリカ」に來れば、是非とも自動車は持たねばならぬ、生活費の高いこの国で海軍士官としての体面を保たねばならぬ、何を勉強するにも高い月謝を払わねばならぬから、極端に貧乏するに決まっている。その間に、出来得るだけ観察旅行をする必要がある、否、米国の隅々残る隈なく踏破してもらいたいのである。この旅行が将来のため何より為になる勉強であり、研究である。室に閉じ籠もつて英語の本を読む事も勉強かも知れぬが、それは日本にいても出来る。駐在中はこの国にいる時でなければ他所では出来ない事に主力を注ぐべきで、そのうちでも旅行が一番重要だ。ところが米国は、旅費が嵩むことまた世界第一だから、平常およそ、あらゆる節約をして旅費を貯えることを心掛ける必要がある。それがために食事なども我慢して、いよいよ空腹でやり切れなくなったら、昼食を問わずその時食べるのだ。これで栄養不良になることもなければ、元気の衰えることもない。僕が駐在時代に体験済みだ。⁽⁴⁷⁾

山本が米国駐在中、各地の石油産地や製油所などを視察して廻っていたことは先述の通りであり、そのための

旅費を捻出するために、節約を心掛けて食事も我慢していた、というわけである。こうした実体験を踏まえての、伊藤へのアドバイスであった。伊藤はこれを受けて米国生活をスタートさせ、そしてイエール大学に留学することになる。なお、伊藤の在米中の一九二七年十一月十五日に、先述の通り山本に帰朝命令が出され、同日、後任として坂野常善が任じられており、その翌月に伊藤は中佐に進級している。⁽⁴⁸⁾

イエール大学には一八七〇年入学の大原令之助(本名・吉原重俊。のち、日銀総裁)以来、多くの日本人留学生が学んでおり、特に一八九〇年代以降に留学者が急増し、明治期だけでも、その総数は一七六名に上っている。初期は法律、続いて、経済学、神学、哲学を専攻する学生が目立つ。⁽⁴⁹⁾一九〇二年にイエール大学で博士号を取得した朝河貫一が、当時、同大学で日本文化史担当の助教を務めていた。⁽⁵⁰⁾

中田整一は、イエール大学において伊藤の記録を調査しているが、それによると、伊藤は二年間の米国滞在中、後半の一年間、イエールで学んでおり、大学院の修士課程に在籍していたという。履修したのは、経済学、社会学、米国政治学で、成績表については公開されていない。中田は、「伊藤は米国の国民性や歴史、伝統、政治など、将来の国策や外交に役立つ事項を懸命に身につけようとしていた」と指摘している。伊藤は学生寮に住んでいたらしく、若い学生たちとともに語学の習得にも励んだ。⁽⁵¹⁾ 日本語を話す機会がきわめて少ない場所を選び、大学の寄宿舎で米国の学生と生活を共にすることも、山本からのアドバイスであった。⁽⁵²⁾

伊藤は、この米国滞在中、米国海軍作戦情報課のレイモンド・A・スプルーアンス中佐と親交をもっている。スプルーアンスはのちに太平洋戦争の際、第二艦隊司令長官・伊藤の座乗する戦艦「大和」を撃沈する命令を下す、米国海軍第五艦隊司令長官となる人物で、当時は情報収集のため、ワシントンDCに滞在している日本の軍人や外交官と接触していた。伊藤は海軍武官事務所の前任駐在員も務めており、その関係で、情報収集を目的としつつ、上司の坂野とともに、スプルーアンスの一家と交流を深めていったといわれている。⁽⁵³⁾ 吉田は、伊藤とス

ブルーアンスを「学者風な肌合いの日米情報合戦の影の立役者」と称し、ブルーアンスのなかには、坂野や伊藤との交流を通して、人種的偏見を超えた日本人に対する親しみと敬愛が生まれていった、と指摘する。彼ら実際は、慎重な情報交換から家族を交えたダンスやパーティーにも及んだ。⁽⁵⁴⁾伊藤は、山本にアドバイスされたように各地を視察旅行しようだが、⁽⁵⁵⁾その上で、現地ではかできない体験を、たしかに重ねていたわけである。

一九二九年五月一日、伊藤は帰朝を命じられ、以後、巡洋艦「木曾」艦長、戦艦「榛名」艦長、第二艦隊參謀長、海軍省人事局長などを経て、一九四一年に軍令部次長となつて、日米開戦を迎える。⁽⁵⁶⁾

五、むすび

山本、山口、伊藤は、米国滞在中、それぞれ名門大学で語学習得や政治、経済などの学習、国民性の理解に努め、また、米国人との交流を深めて、現地ではか得られない情報の収集にも励んだ。いずれも、約二年間の滞在中、半年から一年ほどの間、大学で学んだほか、視察などの情報収集活動に取り組んでいたこと、まず山本が留学や視察にあたり、その経験が山口と伊藤に影響を与えている点、特徴的である。

どこに留学して何を学ぶか、何を視察して研究するか、といったことは、山本に対する上田の指導にみられるように、監督にあたる駐在武官の裁量によるところが大きかった。⁽⁵⁷⁾山本は武官時代、渡米してきた伊藤と小林、中野に対して「伊藤、小林両君は少佐でもあり、既に Grown up しておるので、今さら自分が敲き直すことも出来ぬので、自分は駐在員監督だけれども両人は放任する。しかし中野中尉は、いまだ若くて見込みがあるし、思い切り指導してやる」と述べ、中野にボストンに留学して電気工学を勉強するよう命じたが、伊藤と小林は身の振り方を自分で考えねばならず、補佐官の意見を聞きながら思案することとなつた、と伊藤は回想している。⁽⁵⁸⁾実

際、中野はMITで電気工学を学び、⁽⁵⁹⁾一九二九年三月には、駐在期間を六ヶ月延長されているが、海軍省は「本件ハ前任山本在米国大使館附武官ノ時ヨリノ懸案」であることなど理由に、これを認めている。⁽⁶⁰⁾

こうした過程を経て実践された学習や視察も、日米関係の壁に阻まれつつあった。日本にとって米国はすでに仮想敵国であり、カリフォルニアにおける日本人移民差別問題や排日移民法の制定、日本の中国大陸政策、米国内での黃禍論の台頭などをめぐって、日米関係には暗雲が漂いはじめており、井出が山本とともに米国を視察した一九二四年当時には、「我々を極度に警戒して、こちらが見たいと思ふ所は、仲々秘密にして見せてくれないし、先方で見せてくれるものは、こちらではどうでも良い所であったりして苦心を要した」と井出は振り返っている。⁽⁶²⁾ 山本の生活は米国政府からチェックされていたし、伊藤のスプルーアンスとの交流も、緊張を伴うものであった。彼らの情報収集活動は、かなりの困難を伴ったにちがいない。

さらに、一九三〇年代に入り、満洲事変の勃発以降、日米の利害が激しく衝突するようになってくると、それが海軍士官の米国留学にも影響を与えていく。一九三二年一月に海軍少佐で米国駐在を命じられた中澤佑（のち、軍令部作戦部長）は、「満洲事変以来、日米関係が悪化してきたので、私の駐在計画も変更され……西部に移るこゝととなった」と回想している。かくして、中澤は同年十月から、西部カリフォルニア州のスタンフォード大学に留学し、学生寮に入って米国の憲法や経済、歴史を学びつつ、西部各地を視察して情報収集に努めた。⁽⁶³⁾ 自らも一九四〇年から海軍少佐でプリンストン大学に留学した実松讓によると、満洲事変の発端となる柳条湖事件によって日米関係が悪化し、海軍として太平洋の米艦隊の動向を察知する必要があるため、当初東海岸で語学や米国情報の研究に努めていた中澤と鳥居卓哉少佐を、米太平洋艦隊の拠点である西海岸に駐在させることとなったのだという。⁽⁶⁴⁾

さらに日本海軍は、中澤が帰国した一九三四年から米国での情報収集活動に力を入れ、八月に山口が駐米日本

大使館付海軍武官に着任すると、山口のもと、ワシントンDCに拠点を設けて諜報活動をさかんに展開し、米
海軍情報部も山口サイドを監視していたといわれている。⁽⁶⁵⁾もとより、こうした情報戦で山口に期待されていた要
素の一つが、米国留学経験であり、そこで身につけた語学力であり、専門知識であったことは、いうまでもない。
米軍側も、そのことをよく察知していた。当時、米海軍情報部極東担当だったエリス・M・ザカリアス（のち、
米海軍情報部長）は、一九三五年に日独のスパイが協調しているのを確認したとして、「日本海軍武官は、山口
多聞海軍大佐で、彼の人ざわりの良い態度と、アメリカに対する広い知識は、「語学将校」としての、永いアメ
リカ滞在期間中に身につけたものであった。……日本海軍がアメリカにおけるスパイ活動を強化しようと決めた
時、彼らは山口をスパイ活動の中心人物とし、彼にワシントンの住宅区域にある上流アパート、アルバン・タ
ワーの中の事務所に、スパイ組織の万端の用意をととのえさせた。もしアメリカにおける日本のスパイ活動強化
の証拠が必要であるならば、ワシントンへの山口の到着が何よりの証拠である」と述べ、晩餐会で山口不在の夜、
電気屋を使って山口の部屋に潜入し、密かに調査させていたと証言している。⁽⁶⁶⁾ザカリアスは山本にも接触して
おり、山本とポーカーをしたが、「彼は諜報とポーカーの双方の困難な任務に対処すべく、人々を自宅に招待して
いた」として、その場で山本と情報交換の駆け引きをしていたと回顧している。⁽⁶⁷⁾

一九〇〇年代、日米両国は、親日的世論を背景に、セオドア・ローズヴェルト大統領が日露戦争の終結を仲裁
するなど、良好な関係にあった。その仲裁を導いた一因が、ハーバード大学卒業生の金子堅太郎が展開した広報
外交にあり、金子が同大学の人脉を頼ったことは、すでに松村正義があきらかにしている。⁽⁶⁸⁾第一次世界大戦を経
て、一九一九年から一九二九年にかけては、そこから角逐と衝突の一九三〇、四〇年代へと向かっていく狭間に
あって、次第に緊張の度を高めていく過渡期にあたっていた。その時期に米国留学経験を積んだ海軍士官たちが、
その後の日米関係の悪化のなかで、どのような役割を果たし、対米観を変化させていったか、あるいは変化させ

なかつたのか、その点の検証は今後の課題としたい。

- (1) この三名以外にも、ほぼ同時期に、百武源吾（開戦時、海軍省高等技術会議議長）、武井大助（開戦時、海軍省経理局長）、長谷川清（開戦時、台湾総督）、小林謙五（開戦時、第一艦隊参謀長）、中原義正（開戦時、海軍省人事局長）、保科善四郎（開戦時、海軍省兵備局長）などの海軍士官が、米国に駐在している（海軍歴史保存会編『日本海軍史』第九卷、海軍歴史保存会、一九九六年、五六～五七、五九～六〇、二二三、三三三、三八六～三八七、五三一頁）。
- (2) 吉田満『提督伊藤整一の生涯』（文藝春秋、一九七八年）、四二頁。吉田は東京帝国大学法学部から学徒出陣で海軍に入り、海軍少尉で伊藤の指揮する戦艦「大和」に搭乗して天一号作戦に参加した。吉田の生涯については、粕谷一希『鎮魂 吉田満とその時代』（文春新書、二〇〇五年）など、参照。
- (3) 内山正熊「在外武官の研究」、『法学研究』第五四卷三号、一九八一年三月、一七頁。この時期の日米関係、および日本海軍の対米政策については、麻田貞雄『両大戦間の日米関係―海軍と政策決定過程』（東京大学出版会、一九九五年）など、参照。
- (4) 「附録 日本帝国の国防方針、用兵綱領」（中澤佑刊行会編『海軍中将中澤佑―海軍作戦部長・人事局長回想録』原書房、一九七九年）、二四七～二六〇頁。この後、一九一八年に帝国国防方針は改定されているが、終戦直後に焼却あるいは散逸したため、その本文は発見されていない（朴完「大正七年帝国国防方針に関する小論―その改定過程及び内閣保存過程を中心に」、『東京大学日本史学研究室紀要』第一七号、二〇一三年三月、三三三～三四頁）。帝国国防方針については、黒野耐『帝国国防方針の研究―陸海軍国防思想の展開と特徴』（総和社、二〇〇〇年）など、参照。
- (5) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref:C14061002700、帝国国防方針 大一一（防衛省防衛研究所）。
- (6) 高木不二『幕末維新期の米国学』横井左平太の海軍修学（慶應義塾大学出版会、二〇一五年）、中拂仁「明治黎明期における米・アナポリス海軍士官学校日本人留学生」（『国士館大学政経論叢』第一一二号、二〇〇〇年六月）、島田謹二『アメリカにおける秋山真之―明治期日本人の肖像』（朝日新聞社、一九六九年）。

- (7) 田中宏巳『山本五十六』(吉川弘文館、二〇一〇年)、七二頁。
- (8) 前掲『日本海軍史』第九卷、七一頁。
- (9) 新渡戸稲造著／木下菊人訳『日米関係史』(新渡戸稲造全集編集委員会編『新渡戸稲造全集』第一七卷、教文館、一九八五年)、五四〇頁。
- (10) 森山優「永野修身―海軍「主流派」の選択」(筒井清忠編『昭和史講義 軍人篇』ちくま新書、二〇一八年)、二一六頁、前掲『日本海軍史』第九卷、五一―五二頁。永野が帰朝命令を受けたのは一九二三年二月であるため、後述の山口の米国駐在中も駐在武官に在任していた(前掲『日本海軍史』第九卷、五一頁)。なお、永野は一九一三―一四年度、ハーバード大学大学院に一年生として在籍し、政治学を学んだ(*Harvard University Catalogue 1913-14* (Cambridge: Harvard University, 1913), p. 137)。
- (11) 『JACAR: B16080428600』帝国武官出張駐在及留学関係雑件／海軍之部 第三卷 (6-1-6-1_2_003) (外務省外交史料館)。
- (12) 『JACAR: C10100875800』大正八年 外国駐在員報告 卷六止 (防衛省防衛研究所)、『JACAR: C10100875900』大正八年 外国駐在員報告 卷六止 (防衛省防衛研究所)、『JACAR: RefC10100876000』大正八年 外国駐在員報告 卷六止 (防衛省防衛研究所)、『JACAR: RefC10100876400』大正八年 外国駐在員報告 卷六止 (防衛省防衛研究所)。
- (13) 反町栄一『人間山本五十六―元帥の生涯』(光和堂、一九七八年)、二二三―二二五頁。
- (14) 長岡市立中央図書館文書資料室編『山本五十六の書簡―長岡市立中央図書館文書資料室所蔵資料を中心にして』(長岡市立中央図書館文書資料室、二〇〇六年)、六三頁。なお、山本は留学中、語学の学習のためにウィリアム・シェイクスピアの全集を購入したという(山本五十六記念館『改訂版 山本五十六記念館展示図録』山本元帥景仰会、二〇〇一年、一五頁)。
- (15) Harvard University. Faculty of Arts and Sciences Undergraduate Student Records. Student folder of Isoroku Yamamoto, Special Student 1919-1920. UAH115.88.10 Box 120. Harvard University Archives.
- (16) 前掲『山本五十六の書簡―長岡市立中央図書館文書資料室所蔵資料を中心にして』、一〇二頁。

- (17) Harvard University. Faculty of Arts and Sciences Absence Records. Absence Record of Isoroku Yamamoto, Special Student 1919-1920. UAIH 152.10 Box 2. Harvard University Archives. 本資料および注(15)の資料の提供および掲載許可をいただいたハーバード大学アーカイブスのご好意に感謝申し上げます。次第である。
- (18) *Harvard University Catalogue 1919-20* (Cambridge: Harvard University, 1920), p. 350. このカタログに収録されている学生名簿の「Special Students under the Faculty of Arts and Sciences」の項目に於て「Yamamoto, Isoroku, Tokyo, Japan, 157 Naples Rd Bkline」と記載されており、身分と専攻に ついては「Naval Officer. English」と記されている。(Ibid. p. 167)。
- (19) 前掲『山本五十六の書簡―長岡市立中央図書館文書資料室所蔵資料を中心にして』、一〇四頁。
- (20) 森村勇「強い犬は吠えない」(山本元帥編纂会編『噫山本元帥』文藝春秋、一九四四年)、一一三―一一六頁。
- (21) 小熊信一郎「山本元帥と将棋」(前掲『噫山本元帥』)、一一七―一二二頁。
- (22) 三戸由彦「山本元帥ポストン滞在中の思い出」(新人物往来社編『追悼 山本五十六』新人物文庫、二〇一〇年)、一〇八―一二二頁。初出は『水交社記事』第四一卷三号(一九四三年九月二五日)。三好彰「ポストン日本学生会の記録」(三好彰、二〇二〇年)によると、一九一九年二月二〇日に開かれたポストン日本学生会の会合に、山本は参加しており、海軍技師の竹内孝一郎も同席していた(三〇―三二頁)。こうした機会を通じて、日本人同士、海軍関係者同士の親交を深めていたのである。
- (23) 阿川弘之『新版 山本五十六』(新潮社、一九七五年)、七七頁。このほか、山本一生「水を石油に変える人―山本五十六、不覚の一瞬」(文藝春秋、二〇一七年)は、ハーバード大学所蔵資料は用いていないものの、山本の米國留学について、本稿で利用した山本の高野宛書簡や枋内次官への報告書などを用いて、比較的詳しく記述している(五四―六四頁)。
- (24) Seymour Morris Jr., *American History Revised: 200 Startling Facts That Never Made It into the Textbooks* (New York: Broadway Books, 2010), p. 162.
- (25) 「JACAR : C10100876200」 大正八年 外国駐在員報告 卷六止 (防衛省防衛研究所)。
- (26) 「JACAR : C10100876400」 大正八年 外国駐在員報告 卷六止 (防衛省防衛研究所)。「JACAR : C10100876600」

- 大正八年 外国駐在員報告 卷六止（防衛省防衛研究所）「JACAR: RefC10100876700」 大正八年 外国駐在員報告 卷六止（防衛省防衛研究所）「JACAR: RefC10100876800」 大正八年 外国駐在員報告 卷六止（防衛省防衛研究所）「一九二〇年四月二六日付高野季八宛山本五十六絵葉書（前掲『山本五十六の書簡―長岡市立中央図書館文書資料室所蔵資料を中心にして』、一〇四頁）。
- (27) 前掲『人間山本五十六―元帥の生涯』、二三六―二三九頁、前掲『山本五十六』、七五―七七頁。山本は帰国後の一九二三年から翌年にかけて、海軍次官の職を解かれて欧米視察に出た井出謙治に随行しているが、その際にも、井出をテキサスの油田に案内している（井出謙治「欧米視察を共に」前掲『噫山本元帥』、九九―一〇一頁）。この油田視察については、前掲『人間山本五十六―元帥の生涯』、二四八―二五〇頁、前掲『改訂版 山本五十六記念館展示図録』、一五頁、前掲『山本五十六』、八二―八三頁、も参照。
- (28) 前掲『日本海軍史』第九卷、七〇頁。山本の長男・義正によると、一九一九年二月七日付で、進級祝いのために海軍の仲間と日本料理を食べにいくといった手紙を、山本は妻・礼子宛に送っている（山本義正『父 山本五十六』朝日文庫、二〇一一年、一五四―一五五頁）。
- (29) 前掲『山本五十六』、七四―七五頁。
- (30) 朝日新聞社編『元帥山本五十六伝』（朝日新聞社、一九四三年）、八〇頁。
- (31) 前掲『日本海軍史』第九卷、七〇頁。
- (32) 三和義勇「山本元帥の思い出」（前掲『追悼 山本五十六』、一九〇―一九二頁。初出は『水交社記事』第四一巻三号（一九四三年九月二五日）。
- (33) 前掲『両大戦間の日米関係―海軍と政策決定過程』、二二九―二二〇頁。最初の米国駐在中に山本が航空機および石油に寄せた関心については、ジョン・D・ポッター著／児島襄訳『新装版 太平洋の提督―山本五十六の生涯』（恒文社、二〇〇八年）、一九―二二頁、も参照。山本は一九二〇年頃、米国海軍将官会議が潜水艦・飛行機を海戦上の重要兵器とみなし、その発達のための研究の促進を要望している、といった報告書を記している（日本海軍航空史編纂委員会編『日本海軍航空史（一）用兵篇』時事通信社、一九六九年、九三―九四頁）。なお、最近邦訳が刊行された、デイク・レイア著／芝瑞紀・三宅康雄・小金輝彦・飯塚久道訳『アメリカが見た山本五十六―「撃墜計画」

の秘められた真実』上(原書房、二〇二〇年)も、二度の米国駐在を通して山本が航空戦力重視の考え方を固めたこと、米国内の石油精製工場を視察したことなどに言及している。またレイアは、「山本はハーヴァード大学に留学し、経済学と外国人向けの集中的な英語の授業(「イングリッシュユエ」と呼ばれていた)を受講した」としているが、本文の通り、山本がハーバードで英語以外の科目を学んだ記録は残されていない(七二―七五頁)。

(34) 前掲『日本海軍史』第九卷、七〇―七一頁。

(35) 前掲『日本海軍史』第九卷、四四九頁。

(36) 『JACAR : B16080428800』 帝国武官出張駐在及留学関係雑件／海軍之部 第三卷(6-1-6-1_2_003) (外務省外交史料館)。

(37) 星亮一『果断の提督 山口多聞―ミッドウエーに消えた勇将の生涯』(光人社NF文庫、二〇一六年)、二八―三〇頁。

(38) プリンストン大学東アジア図書館の野口契子氏のご教示による。

(39) Japanese Students: 1884-1949. Historical Subject Files Collection. Box 383, Folder 16; Princeton University Archives, Seeley G. Mudd Manuscript Library, Special Collections, Princeton University Library. の資料による。と、山口と同時期に、九州帝国大学農学部助教授の大島広が、訪問教授としてプリンストンに滞在していた。

(40) 前掲『果断の提督 山口多聞―ミッドウエーに消えた勇将の生涯』、三〇頁。

(41) 『JACAR : C086050383900』 大正一一年 公文備考 卷二 官職二 (防衛省防衛研究所)。一九四四年二月刊行のプリンストン大学の同窓会誌も、山口がプリンストンの大学院で学んでいたのは、米国の歴史である、としている(Princeton Alumni Weekly, Vol. XLIV, No.16, February 1944, p. 3)。山口はプリンストンを離れたあと、三ヶ月間ヨーロッパ各国を視察し、日本への帰国の途上、プリンストンを再訪して、バルカン半島を中心としたヨーロッパ情勢分析を『The Daily Princetonian』一九三三年四月三日号で語っている(“Balkan War Imminent, Says Japanese Officer”, *The Daily Princetonian*, Volume 44, Number 26, April 3, 1923, pp. 3-4)。

(42) 麻田貞雄「ワシントン海軍軍縮の政治過程―ふたりの加藤をめぐる―」(『同志社法学』第四九卷三号、一九九八年三月)、九二―一二二頁、前掲『両大戦間の日米関係―海軍と政策決定過程』、一五四―一六〇頁、松田十刻『山口

- 多聞―空母「飛龍」と運命を共にした不屈の名指揮官』（光人社、二〇一〇年）、一〇五―一〇八頁。なお、平松良太は、加藤全権は海軍全体の支持を得て条約調印に踏み切っており、両加藤の対立も激しいものではなく、海軍の団結を引き裂くことはなかったとしている（平松良太「第二次世界大戦と加藤友三郎の海軍改革（二）―一九一五―一九二三年」『法学論叢』第一六八巻四号、二〇一一年一月、一一一―一二〇頁）。
- (43) 松田十刻『ミッドウエー海戦の闘将山口多聞』（学研M文庫、二〇〇二年）、七六―七七頁。
- (44) 山口宗敏『父・山口多聞―空母「飛龍」の最後と多聞「愛」の手紙』（光人社、二〇〇二年）、三五―三六頁。
- (45) 前掲『日本海軍史』第九巻、四四九頁。
- (46) 前掲『日本海軍史』第九巻、六―七頁。
- (47) 伊藤整一「故山本元帥の追憶」（前掲『追悼山本五十六』、九五―一〇〇頁。初出は『水交社記事』第四一卷三号（一九四三年九月二五日）。
- (48) 前掲『日本海軍史』第九巻、七、二四八頁。
- (49) 「エール大学日本学生名簿」(Manuscripts and Archives, Yale University Library)。
- (50) 山内晴子『朝河貫一論―その学問形成と実践』（早稲田大学出版部、二〇一〇年）、六二四―六二五頁。
- (51) 中田整一『四月七日の桜―戦艦「大和」と伊藤整一の最期』（講談社、二〇一五年）、七四―七七頁。
- (52) 前掲「故山本元帥の追憶」、一〇〇―一〇二頁。
- (53) 前掲『四月七日の桜―戦艦「大和」と伊藤整一の最期』、七七―八四頁、トーマス・B・ブユエル著／小城正訳『提督・スプルーアンス』（読売新聞社、一九七五年）、七三―七四頁。
- (54) 前掲『提督伊藤整一の生涯』、四九―五三頁。
- (55) 前掲『山本五十六』、一〇五頁。
- (56) 前掲『日本海軍史』第九巻、七頁。
- (57) 前掲『山本五十六』、一〇四頁。
- (58) 前掲「故山本元帥の追憶」、九五―九六頁。
- (59) 前掲『山本五十六』、一〇五頁。

- (60) [JACAR : C04016645800、公文備考 E 教育演習検閲巻一 (防衛省防衛研究所)]。
- (61) 五百旗頭真編『日米関係史』(有斐閣ブックス、二〇〇八年)、二九〜一〇九頁。
- (62) 前掲「欧米視察を共に」、一〇〇頁。
- (63) 前掲「海軍中将中澤佑一海軍作戦部長・人事局長回想録」、一〜一〇頁。中澤は渡米にあたり、長く米国に勤務した長谷川清(海軍少将)から、山口を例に、語学の勉強に重点を置くこと、そのために大学の学生寮に入ることなどをアドバイスされたという(同前、五〜六頁)。
- (64) 実松讓『米内光政秘書官の回想』(光人社、一九八九年)、一二〇〜一四一頁。
- (65) 前掲「四月七日の桜―戦艦「大和」と伊藤整一の最期」、八〇頁、前掲「山口多聞―空母「飛龍」と運命を共にした不屈の名指揮官」、一三〇頁。軍令部では、ワシントンの駐在武官を通じて、米国の「オレンジ・プラン」についてかなり正確な情報を入手し、一九三〇年代半ばには、米国の海軍拡充を対日敵視政策の一環ととらえていたという(前掲「両大戦間の日米関係―海軍と政策決定過程」、二二八〜二二九頁)。
- (66) エリス・M・ザカリアス著／日刊労働通信社訳『日本との秘密戦』(朝日ソノラマ、一九八五年)、六二〜九七頁。
- (67) Ellis M Zacharias, *Secret Missions: the Story of an Intelligence Officer* (New York: G.P. Putnam's Sons, 1946), pp. 93-94.
- (68) 松村正義『日露戦争と金子堅太郎―広報外交の研究』(新有堂、一九八〇年)、参照。

〔追記〕 本稿執筆にあたり、ハーバード大学アーカイブスのジュリアナ・クイパース氏、プリンストン大学東アジア図書館の野口契子氏、山本五十六記念館の荒木美和子氏から、貴重な史料のご提供やご教示を頂戴した。記して感謝申し上げます。